また、いつでもカネさえ出せば食料はあるというものではありません。世界の人口はどんどん増えています。また、いつまでも日本にカネがあるという保証は全くありません。

それに、異常気象が頻発しています。凶作で作物が高騰し、金持ちしか食料が買えないという事態も十分予想されます。そして、何より安全な食べ物はやっぱり国産です。

だから、「自分の国民の食料は自分の国で作る」というのは基本中の基本の、国の政策だと私は思います。しかし、日本の現実は、家畜のエサも含めた食べ物の一番主要な穀物の自給率では 28% くらいでしょうか。先進国の中では驚異的な低さです。（アメリカ 118%、イギリス 101%、フランス 176%、ドイツ 103%（2011年農水省統計））

実は、これと、私達の田んぼが荒れるかどうかは、非常に密接に関係していると思います。

おおざっぱに言うと、食料自給率と農地の荒れる割合は反比例です。自給率が上がるほど荒れる農地は減り、自給率が下がるほど荒れる農地は増えてきます。

つまり、現状では日本は約 7 割の農地が必要ないということでしょうか。こんなことでどうなるのでしょう。どうして他の先進国並みに食料自給率を上げることができないのでしょうか。それと田舎の過疎は直結した問題だと私は思います。

何としても田んぼは守りましょう。日本だけ、こんな低い食料自給率でいいはずがありません。いつか破綻が来ます。

実は日本は世界でも有数の農業に適した国です。温暖で雨がよく降るので土がよく肥えおいしい物がいっぱいとれる国です。何とか維持する根本的な方策を考えていこうではありませんか。

地域も同じです。山、水、国土、環境を守るためには、今あるすべての集落はきちんと維持されなければなりません。

「この町の生き残りをかけて○○を頑張ろう?」なんてよく言われますが、では、生き残れなかった地域はどうなるのでしょう。廃れてしまっていいのでしょうか？　違いますよね、すべての地域が生き残らなければいけないのです。

『一人の百歩より百人の一歩』

田舎が過疎になっていくということは、人として一番大事な、食料、水、環境、国土、人のつながり・・を犠牲にして、目先の利益に走って行くからだと思います。

都会に住んでいると人間は万能だと思いがちです。科学技術で何でもできると。だから、自然の大切さをつい忘れ、傲慢になりがちです。でも、自然の中で生活していると人は人間の限界も知り、おのずから謙虚になります。それは人に対しても同じです。

その一番の現れが、子どもの違いだと思います。宍粟の子どもたちは本当に素直です。感謝と助け合いがまだまだ残っている地域で育ったということがハッキリ分かる子どもたちです。こんな素晴らしい地域をなくさないように、みんなで頑張りましょう。

今の社会はやたら競争をあおる社会のように思います。一部の成功者も作るが大多数は取り残される、そんな競争を。だから、こんなに技術は進歩しているのに、私達の暮らしは不安でいっぱいです。

私達はそんな暮らしを求めているのではないはずです。そんな暮らしを子や孫たちに残したくはないです。

一人勝ちではなく、ささやかでもいい、みんなが共に安心して暮らしていける社会を残していきたいです。それが『一人の百歩より百人の一歩』というもう一つの意味なのです。

人間の基本は「助け合い」。それがしっかり根付いた地域社会をみんなでさらに作っていきましょう。

欲を少なく、足るを知り、謙虚と感謝を忘れずに。

続きは次号に！

今井和夫　プロフィール

昭和33年（1958年）5月5日生まれ	兵庫県明石市出身
昭和52年	兵庫県立加古川東高校卒業
昭和56年	慶應義塾大学経済学部卒業
昭和57年～63年	大阪市立中学校教諭
平成元年	宍粟市千種町中島の町営住宅に転居
平成2年	千種町岩野辺に1年かけて セルフビルドで家を造り転居 平飼い自然養鶏を始める。 「いまい農場」開設 地域の皆様に支えられ現在に至る

主な活動歴

平成5年～13年	千種町岩野辺消防団
平成5年～	空手教室「千空会」主宰
平成5年～	岩野辺獅子舞保存会会員
平成6年～10年	岩野辺子ども文庫開設
平成10年～15年	ミニコミ誌「グラフ岩野辺」主宰
平成12年	宍粟郡連合PTA会長
平成14年	千種町学校給食検討委員会委員長
平成23年～	千種町野菜生産組合会長
平成24年～26年	全国自然養鶏会会長
平成26年～	千種町町づくり推進委員会広報部長 広報誌「ええとこ通信」発行に携わる